

Title	中学生英語キャンプのカリキュラム開発：英語での「発信力」育成を目指して
Author(s)	東, 仁美
Citation	聖学院大学論叢, 第 27 巻第 1 号, 2014.10 : 213-228
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5075
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

〈研究ノート〉

中学生英語キャンプのカリキュラム開発

——英語での「発信力」育成を目指して——

東 仁 美

抄 録

荒川区教育委員会は2008年度より5日間の中学生対象英語キャンプを開催してきた。筆者はコーディネーターとして5年間このプログラムの開発に関わってきた。この英語キャンプの目的は、ネイティブ・スピーカーと共に集中的に英語の学習をすること、荒川区について学び、自分が住んでいる町の良さを英語で伝えること、英語で発表する力を身に付けることである。本稿では、5日間の英語キャンプのプログラムを考察し、英語での発信力を育成するためのカリキュラム開発への提言を試みる。

キーワード；英語キャンプ，英語での発信力，英語漬け体験，カリキュラム開発，小中連携

1. はじめに

東京都荒川区は、教育特区認定⁽¹⁾を受けて、2004年度より小学校第1学年からの英語活動を導入した。そして、充実した英語コミュニケーションの場を提供するため、同年から高学年を対象とした⁽²⁾4泊5日の英語キャンプ「荒川区ワールドスクール」を実施している。さらに、2008年度からはこのプログラムを発展させた内容で、中学生を対象としたワールドスクールが始まり、2012年度までの5年間実施された。

小学校外国語活動が必修化されて3年が経過し、高学年での外国語活動を中学校英語科に円滑に接続させることが大きな課題となっている。このような状況下、荒川区の英語キャンプは、まず小学生プログラムが実施され、追隨して中学生プログラムが開発されたという特異な例である。

本稿では、6年生対象のプログラムをベースに開発された中学生対象の英語キャンプを概観し、小学校段階で育まれてきたコミュニケーション能力の素地を生かして、英語での発信力を中学校レベルでいかに伸ばしていくかを考察する。

2. 荒川区ワールドスクールの概要

2.1 先行事例

文部科学省(2013a)は、2013年3月に「人材力強化のための教育戦略」を発表した。この教育戦略のまとめの中で、「初等中等教育段階からの世界トップレベルの学力・人間力強化“グローバルJr.”の育成」の具体的方向性として、「子供たちの英語漬け体験の機会の充実(イングリッシュキャンプ等)」という項目がある。「英語キャンプ」の実施が外国語によるコミュニケーション能力・論理的思考力育成の一環として提案されているのである。このように、初等中等教育段階からの英語キャンプの取り組みは、国が進める教育戦略の一つとして今後さらに注目されると考えられる。

教育委員会が主催する英語キャンプの実践例としては、北海道教育委員会が2012年度から実施しているイングリッシュキャンプがある。北海道教育委員会は、このイングリッシュキャンプを「地球規模の視野と地域の視点を併せ持った北海道のグローバル化を担う人材の育成を目的に、外国人との活動や宿泊生活を通じて、「生きた英語」を学び、国際感覚を磨く英語漬けのイングリッシュキャンプ」と位置付けている(北海道教育委員会, 2013)。このキャンプは、道内6ヶ所で同時に開催され、プレキャンプ(5月開催, 1泊2日)、メインキャンプ(夏休み中に開催, 3泊4日か4泊5日)、ポストキャンプ(冬休み中に開催, 3泊4日か4泊5日)と、通年の3回コースで英語漬けにしようとする点特徴的である。また、英語力の向上や高校・大学への進路決定への意識高揚を図るため、初級・中級・上級のレベル別で実施し、ALTがキャンプの事前・事後に電子メールなどを活用し、参加者の学習を継続的にサポートすることは特記に値する。この取り組みを取材した北海道新聞は、北海道イングリッシュキャンプについて以下のように掲載している。

「書けるし読めるが、話せない」といわれる英語教育の課題克服に向けて、道教委が本年度導入した「イングリッシュキャンプ」が、1月に道内6会場にて、開催。小中高校生を対象に、英語を使って3泊4日の生活を送りながら、外国人と触れ合う企画。子供たちは積極的に話しかけたり、相手の言うことを理解しようとコミュニケーションに努めたりして、自信をつかんだようだった。

(北海道新聞, 2013年1月23日)

5年生から高校生を対象にしたイングリッシュキャンプは、2013年度も継続して開催されている。また、2013度からは4歳から4年生とその保護者を対象として1泊2日のジュニア・イングリッシュキャンプが企画された。4年生までの幼児・児童を対象としたこの英語キャンプは、参加者が外国の人々と一緒に過ごしながら、英語や外国の文化にふれる体験を提供し、また、保護者に

とってグローバル化時代の子育てについて考える機会とすることを目的としている。

教育委員会主催の日帰りや1泊の英語キャンプは全国で報告されているが（愛知県教育委員会，2013；広島県教育委員会，2008 他），北海道教育委員会主催のイングリッシュキャンプは，単発ではなく通年の3回コースによる開催やそのフォローアップの仕組みなどで注目したい英語キャンプである。

満尾（2007，2009）は，小学校の授業で実施している英語活動にはない英語キャンプの利点として，（1）方略的能力を試し，磨くことができる（2）英語接触量が多くなる（3）外国語から第二言語としての英語指導へと発想の転換ができる（4）児童が英語により親しみを覚えると共に，学習への広がりを持つことができる，という4項目を挙げている。

2.2 ワールドスクール小学生プログラム

荒川区ワールドスクールは「国内留学」を目指して，2004年から開催されている。第3回の2006年度のプログラムからは筆者がコーディネーターとして，英語キャンプの企画を担当した。荒川区立清里高原少年自然の家を宿舎として，毎年8月下旬に開催される4泊5日の宿泊型キャンプは，清里の自然の中で外国人や日本人の指導員と一緒に英語を楽しく学ぶために企画された。荒川区教育委員会が掲げているワールドスクールの目的は以下の三点である。（1）英語を楽しく学ぼう（2）外国の文化や習慣にふれよう（3）協力して集団生活をつくりあげよう（東，2009）。

区立小学校6年生を対象とした小学生プログラムでは，2013年度には110名が参加しているが，このプログラムでは2日目から4日目の午前中に1日3レッスン（単位時間は50分），合計9レッスン（資料1）が組まれている。AET⁽³⁾と日本人指導員（JET）のチーム・ティーチングで授業が進められ，1グループの児童は8～10名である。

このワールドスクールの英語プログラムの特徴は，以下の4点に集約される。（1）レッスンごとに違うAETが指導し，映像や写真，実物教材を活用した出身国の紹介を通して国際理解を促す（2）文字指導の一環として，ウォーム・アップにフォニックス指導を取り入れる（3）場面シラバスの指導案を採用し，6年生の生活文化から取り上げた題材を活動の中心にする（資料1）（4）9レッスンで扱ったスキットを応用させ，グループごとにオリジナルのスキット劇を作成し，最終日に発表する（グラウンド・フィナーレ）。少人数のグループ活動でレッスン以外にも，ハイキングやショッピング，レクリエーションなどもAETと英語で過ごし，文字通り英語に浸される5日間である。

2.3 中学生プログラムの開発

2008年度から，小学生プログラムと同じ日程で中学生対象のワールドスクールが開催された。中学生プログラムでは，20名の参加者⁽⁴⁾を5名のAETが担当し，1グループ4～5名の生徒に対して，AETと英語科の教員がチーム・ティーチングで指導した。4日目には「荒川の紹介」を英語

表1 中学生プログラム参加者

実施年度	小6での参加者数／全参加者数	リピート率
2008年	9/20人	45%
2009年	7/16人	43.8%
2010年	12/16人	75%
2011年	10/17人	59%
2012年	5/12人	42%

で発表し、最終日は2グループに分かれて荒川のトピックを生かした英語劇を行った。

小学生プログラムの開発の際には、ワールドスクールに参加する引率教員との会議を数回設け、レッスン内容については意見聴取をしたが、カリキュラム作成はコーディネーターに全面的に任されていた。一方、中学生プログラムに関しては、指導者としてワールドスクールに参加する中学校英語科の教員と共同で開発した。そのため、荒川区の中学校英語教育を元にした、集中プログラムならではの内容が濃い授業計画を作成することができた。(資料2)

例年、中学生プログラムに参加する生徒の約半数が6年生の時もワールドスクールに参加していた。(表1)実施後のアンケートの自由記入欄に記載されている「違う小学校の友だちがたくさんできた」、「AETと英語でたくさん話せた」、「グループでのスキット発表がうまくできた」というような英語キャンプでの成功体験を持っている参加者が、二度目の参加となる中学生プログラムの中でも多く活躍している様子が毎年観察された。

3. 小中連携を目指した中学生プログラムの開発

3.1 英語教育の小中連携

2011年度から第5、6学年で必修化された小学校外国語活動であるが、その基本理念の一つに「教育の機会均等の確保」が挙げられている(文部科学省, 2009)。中央教育審議会答申(文部科学省, 2008c)は、中学校に入学した時に共通の基盤が持てるよう、外国語活動を必修化することにより小学校段階で必要な指導内容を提供する、とその意義について説明している。英語教育に限らず、初等中等教育が義務教育として一体的な捉え方をされるようになり、義務教育の充実に向けて、研究開発学校での小中9年間のカリキュラム開発が動き出した。その結果、研究開発学校での小中一貫教育の取り組みに刺激されて、全国的に小中連携の取り組みが広がってきた(天笠, 2013)。村上(2013)は小中連携について「小学校から中学校へという、新しい環境での学習や生活へ移行する段階での不安感の軽減や、それによるいわゆる中1ギャップの課題の解消、小学4~5年生段階での発達上の段差への対応等について、小・中学校が互いに情報交換・交流することを通じ、小・中学

校の円滑な接続と同時に児童・生徒のよりよい教育を目指すことである」(p. 21)としている。

英語教育においては、直山(2012)が指摘するように、中学校英語教育との円滑な接続、すなわち小中連携は小学校外国語活動を進めていく上の大きな課題である。小中連携の考え方として、松川・大下(2007)は、「小学校での英語活動がそれだけで完結するものではなく、中学校英語教育への一定のレディネスを形成するものであるとの認識は必要である」(p. 24)と言及している。渡邊他(2013)は、(1)英語を聞く力が高まっている (2)外国や異文化に対する興味が高まっている (3)英語に対する抵抗感がなくなっている、と小学校外国語活動の導入を評価している。一方で外国語活動が導入されたことにより、中学校における英語教育は状況が変わり、(1)英語の授業に対する新鮮味がなくなり、中学校入学直後から英語嫌いが存在している (2)英語活動に対する温度差、内容の違いの小学校格差が大きい (3)音声中心の指導の弊害として、過剰拡張や過剰一般化(I have a one brother. の発話に見られるような誤用など)の現象が起きている (4)中学校教師が小学校外国語活動を理解していない、という問題を大塚・胡子(2012)は指摘している。

文部科学省が指定した研究開発学校や英語特区などでは、長年英語教育の小中連携の取り組みが進められてきた(荒川区教育委員会, 2010; 枚方市教育委員会, 2013; 吹原・榊井・遠藤, 2010 他)。荒川区では、1年生からの英語教育導入後、2005年度からは小学校英語研究部と中学校外国語研究部による合同研究会が開催されていて、小学校、中学校それぞれでの授業研究及び研究協議が年間各1回、合計2回、小中合同で実施されている(荒川区教育委員会, 2010)。2006, 2007年度のワールドスクールでは、小学生プログラムのアドバイザーとして中学校英語科教員2名が参加し、レッスンの心構え、朝の会でのワンポイント・レッスンの指導、最終日の成果発表会の司会などを担当した。そして、2008年度から中学生プログラムが導入された際には、小学生プログラムを理解しているこの2名の中学校教員がプログラム開発にも関わった。

直山(2012)は、外国語教育における小中連携を「情報交換」「交流」「カリキュラムの連携」の三段階でとらえている。第二段階の「交流」の場として、直山は指導者同士の交流だけでなく、児童と生徒の交流にもふれ、時間と労力がかかるが学習者同士の交流が最も効果的であると述べている。そして、小中で連携したカリキュラムの作成を目指すことが連携の最終的な目標である、と直山は強調している。ワールドスクールでは、カリキュラム開発を同一のコーディネーターが行い、小中の教員合同での打ち合わせを経て開催されるという点では、十分な情報交換ができていえる。次項では、カリキュラムの連携、交流という観点からワールドスクールの特徴的なプログラムを考察する。

3.2 フォニックス指導

3.2.1 文字導入の指導指針

現行の学習指導要領では、「外国語でのコミュニケーションを体験させる際には、音声面を中心と

し、アルファベットなどの文字や単語の取扱いについては、児童の学習負担に配慮しつつ、音声によるコミュニケーションを補助するものとして用いること」(文部科学省, 2008a)とされている。

一方、教育特区として荒川区が2003年に策定した「荒川区小学校英語科指導指針」では、第3学年及び第4学年の目標として「聞く・話す活動に関連して、文字にもふれる」、第5学年及び第6学年の目標として「簡単な英語の文を読んだり、書いたりできる」という項目がある(荒川区教育委員会, 2003)。このように、中学年以上に「読むこと」「書くこと」の領域が加えられていることに関して、荒川区の指導指針では「実践的なコミュニケーション能力を系統的に積み上げていく際には、英語を読んだり書いたりすることもその能力を一層高め、補強する必要な力となってくるととらえたため」(p.5)としている。

3.2.2 フォニックス指導での小中連携

ワールドスクールの小学生プログラムでは、毎レッスンで5分~10分のフォニックス指導が組まれている。アルファベットの太文字、小文字とキーワードの絵が描かれたフォニックスカード⁽⁵⁾を使いながら、フォニックスジングルやフォニックスアルファベットソングで英語の文字の名前と音をレッスンごとに繰り返し学習していく。この学習により、単語の最初の音(initial letter)を読めるようになり、スキット発表の英語台本への抵抗が減っていくという効果が見られる。小学生段階では、AETの発音を真似することでそれぞれの文字の音を学んでいくが、中学生プログラムでは同じフォニックスのキーワードを再活用しながら、明示的な説明を加えた発音練習に発展させている。(資料3)ワールドスクール実施後のアンケートの「どのような力がついたか」という質問に対して、「発音がよくなった」「発音が上達した」という中学生からの回答が毎年複数ある。

小学校段階では、AETの発音を真似してアルファベットの音にふれ、ゲームを通して楽しみながら英語の音に慣れ親しみ、中学校では英語として通用する正しい発音を身に付けるために少人数での指導をする。このように、ワールドスクールでは、文字指導におけるカリキュラムの連携が図られている。

3.3 スキット活動

3.3.1 コミュニケーション活動の場面設定

小学校学習指導要領外国語活動編の内容の取扱いによると、「外国語でのコミュニケーションを体験させる際には、児童の発達の段階を考慮した表現を用い、児童にとって身近なコミュニケーションの場面を設定すること」とされている(文部科学省, 2008a)。

一方、荒川区小学校英語科指導指針では、第3学年及び第4学年のコミュニケーション活動の具体的な展開として「具体的な場面を設定してスキットやロールプレイなどを行う」第5学年及び第6学年では「スキットや劇などでコミュニケーションを疑似体験する」ことが示されている(荒川区教育委員会, 2003)。ワールドスクールで扱う身近なことを場面として設定したスキットやグラ

ンド・フィナーレのスキット劇は荒川区の指導指針が示すコミュニケーション活動の展開として取り入れたものである。

3.3.2 スキット活動での小中連携

小学生プログラムのレッスンでは場面が設定されたスキットを教材として使っている。絵カードを使って英語表現を導入し、ワークシートを使いながらロールプレイなどの発展活動をするというのが基本的な流れである。

中学生プログラムでも同じスキットをリサイクルしているが、中学生のレッスンでは、絵カードから状況を推測させて英語での会話を自分たちで作らせたり、スキットをリスニング活動に使い、空所を埋めていくワークシートに取り組んだりという、より発展的な活動を取り入れている。同じスキットを使うが、「読む・書く」の活動を効果的に組んでいるのが中学生プログラムである。共通の題材を使いながら、音声中心の小学生プログラムでのスキット活動から展開させた中学生プログラムでは、正しく文を書く活動に発展させた点で、カリキュラムの小中連携の試みが工夫されている。

また、中学生のレッスンでは、スキットを導入した後でそのスキットをベースにして、荒川の発信につながるオリジナルスキットの作成という展開活動につなげている。例えば「What shall we do? 遊ぶ約束をしよう」というスキットから、AETをあらかじめ遊園（荒川区内にある区立の遊園地）に誘うという会話に発展させる。（資料4）そして、最終日のグランド・フィナーレでは、レッスンで作ったスキットを15分程度の劇に発展させていく。グランド・フィナーレの詳細については、次項で言及する。

3.4 グランド・フィナーレ

最終日のスキット発表では、小学生は8名程度のグループで5分間の発表を行う。スキットで使う英語表現のほとんどは、9レッスンで出てきた会話表現から取り上げたものである。一方、中学生プログラムでは、4日目に発表した「荒川区の紹介」の内容を10名程度のグループで15分から20分の英語劇にして発表する。台本の作成は、英語科教員がAETと相談しながら進める。中学生は4日目、5日目と2日連続で英語でのプレゼンテーションが続き、かなりハードなスケジュールである。ワールドスクールでは、小学生が午後9時に就寝した後、中学生には10時まで1時間の自主学習の時間があり、中学校英語科の教員やAETも指導にあたっている。小学生プログラムでは音声中心で楽しめるコミュニケーション活動が大半を占めているが、中学生プログラムでは5日間、英語を正しく書くことや暗記して正しい発音で発表の練習をする「英語学習」へシフトしている。

4日目の荒川区の紹介では、グループで決めた一つのテーマについて、調べ学習をし、発表する。取り上げるテーマは「荒川の伝統工芸」「日暮里繊維街」「都電荒川線」「あらかわ遊園」「あっぷるロード（商店街）」などである。資料として、荒川区観光課が作成した日英のパンフレットを読み、

グループで発表の原稿を作る。グランド・フィナーレでは、荒川紹介の発表をした2グループが一つの劇の準備をする。「伝統工芸」と「都電荒川線」をテーマに発表をした2グループの合同でのグランド・フィナーレの発表は、「中学生3人グループが都電荒川線に乗って、荒川の伝統工芸である桐ダンスを買いに行くが、ダンスが大きすぎて電車に乗らず、小さいダンスを買い直す。ダンスは無事に電車に乗せることができたが、購入したダンスは小さすぎて洋服が入らなかった」というオチのある楽しい劇であった。

グランド・フィナーレは、最終日の午前中にワールドスクールの全参加者が体育館に一堂に会して行われる。小中の教員がそれぞれ異校種の児童・生徒の5日間の成果を観察することができる。中学校の英語科教員は小学生の生き生きとした発表に感銘を受け、小学校の教員は中学生の内容の濃い素晴らしい英語劇を目の当たりにして、小学校の英語教育の先にある中学校英語教育に期待を寄せるのである。レベルの高い中学生の英語劇は、小学生にとって英語学習への恰好の刺激となり、「中学生になったらまたワールドスクールに参加したい」という動機付けにもつながっている。

3.5 6年生と中2の交流

ワールドスクールでは、朝の会で英語のワンポイント・レッスンの時間があり、役に立つ表現を中学校英語科教員が紹介していた。中学生プログラムが始まった2008年からは中学生がワンポイント・レッスンを担当した。「今日の表現」を使ったスキットを演じ、その後AETとその日の英語表現を紹介する。中学生が紹介する“No, way!” “Pardon?”などの英語表現は小学生に大人気で、生活の中のあらゆる場面でこれらの表現が使われていた。

また、休み時間に英語でインタビューをしてサインをもらうスタンプラリーでは、中学生が6年生の会話の相手になる。このように、6年生にとって同じキャンプに参加している中学生は、身近な英語学習者のロールモデルとなっている。

直山(2012)が、「一番時間と労力がかかるが、一番効果的である」と指摘する小学生と中学生の交流は、宿泊型のワールドスクールにおいてはさまざまな場面で工夫されている。

4. 英語キャンプでの成果

戦後の日本の英語教育史では、公立校での英語教育開始は中1であったが、2002年の総合的な学習の時間の導入により、小学校での英語活動の実施が可能となった。高学年の外国語活動が必修化された現行の学習指導要領では、外国語活動で育まれたコミュニケーション能力の素地を土台として、中学校英語科ではコミュニケーション能力の基礎を育成するという位置付けになっている。中学校学習指導要領外国語編では「外国語活動を通じて音声面を中心としたコミュニケーションに対する積極的な態度などの一定の素地が育成されることを踏まえ、身近な言語の使用場面や言語の働

きに配慮した言語活動を行わせる」(文部科学省, 2008b)とされている。

荒川区ワールドスクールでは、小学生プログラムが先に実施され、このプログラムをスパイラルな形で発展させる中学生プログラムが開発された。渡邊他(2013)は、小学校英語活動で扱われる身近な場面を応用させ、中学校でも同じような場面設定で活動を行いつつ、より正確で、より適切で、より自然なコミュニケーションの仕方を学ぶ工夫の必要性を説いている。ワールドスクールの中学生プログラムは、既存の小学生プログラムを発展させ、中学生レベルでの英語力を生かしたより高いレベルでの発信力を目指して開発されたものである。小学校段階で育まれた積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度をより深化させ、地元の良さを発信する、という切り口で中学生にとって身近な内容を英語で発信することを促す点がこのプログラムの特徴である。また、ワールドスクールでは、5日間 AET と生活を共にするので、いつでも英語が使える、より解き放たれた環境の中、英語で自己表現する力が育つことが観察された。荒川区では毎年11月に中学生スピーチコンテストが開催されるが、例年ワールドスクール参加者が3~4名出場している。英語キャンプでの培った英語で発信しようという意欲がこのような形で実を結んでいる。

2011年度のワールドスクールで中学生参加者に対して実施したアンケートでは、ワールドスクールで伸ばしたい力として「自分が思っていることを表せるようにしたい」「AETと普通に会話できるようにになりたい」「話す力と書く力を伸ばしたい」など発信力に関することを記入した生徒が約8割だった。また、「発音をよくしたい」「AETと触れ合って、ネイティブの英語の発音を身に付けたい」など発音に関する目標も多く見られた。目標の達成度についての回答では、a. 100%達成された(23%) b. だいたい達成された(59%) c. あまり達成されなかった(12%) 未記入(6%)という結果であった。

英語キャンプという特別な環境の中で育まれた発信力が教室環境の中でも継続して育成されるようなプログラム開発の研究を今後も継続していきたい。

注

- (1) 荒川区は「国際都市『あらかわ』の形成特区」として、構造改革特別区域の認定申請を行い、2003年に構造改革特別区域として認定された。これにより、荒川区では小学校の教育課程に英語科を設定し、実施することが可能となり、2004年度から区内の全ての小学校で第1学年から第6学年まで週1回、英語の授業を開始した。2008年度からは文部科学省教育課程特例校制度の指定を受け、1学年からの英語教育を継続している。
- (2) 2004~2005年度のワールドスクールは対象学年が5,6年生であったが、2006年度より、6年生のみの募集となった。
- (3) 荒川区では小中学校での英語の授業を支援する外国人指導者の呼称をNEA(Native English Assistant)としているが、ワールドスクールでは、初年度よりAET(Assistant English Teacher)という名称を使っており、日本人指導者JET(Japanese English Teacher)とティーム・ティーチングで授業をしている。
- (4) 2008年度~2011年度までは、中1と中2で募集をしていたが、英語力の差が大きすぎるのが問題となり、2012年度は中2のみの募集となった。

- (5) ワールドスクールの教材として使っているフォニックスアルファベットは *Super Kids 2* (1st edition). Longman の著者 Aleda Krause 氏から提供を受けた。*Super Kids 2* (2nd edition) ではこのイラストは使われていないため、データの使用許可を得た。

謝辞

本稿執筆にあたり、荒川区教育委員会指導室から参加児童生徒のアンケート結果のデータ提供及び貴重なご意見とご助言をいただきました。心より御礼申し上げます。

参考文献

- 愛知県教育委員会 (2013) 「イングリッシュキャンプ in あいち」
(www.pref.aichi.jp/.../62455/englishcamp.pdf) 〈2014.6.28 確認〉
- 天笠茂 「なぜ小中連携教育が求められているのか」『教職研修』12月号, 2013 pp. 18-20.
- 荒川区教育委員会『荒川区小学校英語科指導指針及び解説書』荒川区教育委員会 2003.
- 荒川区教育委員会『荒川区立小中学校英語教育ハンドブック2010』荒川区教育委員会 2010.
- 石田雅近「今後の研究課題と展望」小泉仁『小学校英語活動と中学校英語活動の連携についての総合的研究 ―研修の実態と教員意識の調査―平成19年度報告書』平成19-21年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書 2009 pp. 102-109.
- 大塚謙二・胡子美由紀『成功する小中連携! 生徒を英語好きにする入門期の活動55』明治図書出版 2012.
- 直山木綿子「外国語教育における小中連携」萬谷隆一他(編)『小中連携 Q&A と実践 小学校外国語活動と中学校英語をつなぐ40のヒント』開隆堂 2012.
- 東仁美「アウトプットを促進させる高学年でのスキット活動 ―荒川区ワールドスクールでの取り組み」『聖学院大学論叢』21(2), 2009 pp. 155-169.
- 吹原顕子・榊井政明・遠藤千晶「小学校と中学校をつなぐ寝屋川市の英語教育 ―行政の視点から―」『日本児童英語教育学会研究紀要』第29号, 2010 pp. 123-137.
- 枚方市教育委員会 (2013) 「枚方市小中一貫英語教育」
(www.city.hirakata.osaka.jp/soshiki/kysidou/eigo.html) 〈2014.6.28 確認〉
- 広島県教育委員会 (2008) 「中学生イングリッシュキャンプ」
(www.pref.hiroshima.lg.jp/site/kyouiku/06senior-end-h20-global-200801.html) 〈2014.6.28 確認〉
- 北海道教育委員会 (2013) 「北海道イングリッシュキャンプ」
(www.dokyo.pref.hokkaido.lg.jp/hk/ksk/seisaku/englishcamp.htm) 〈2014.6.28 確認〉
- 「道教委初のイングリッシュキャンプ 英語漬け 会話に自信」『北海道新聞』2013年1月23日.
- 松川禮子・大下邦幸(編)『小学校英語と中学校英語を結ぶ ―英語教育における小中連携』高陵社出版 2007.
- 満尾貞行「英語活動プログラムとしての英語キャンプ ―英語キャンプは学習材としてどのような効果を期待できるのか―」『東京純心女子大学紀要』第11号 2007 pp. 23-42.
- 満尾貞行「新学習指導要領と英語キャンプ」『東京純心女子大学紀要』第13号 2009 pp. 79-93.
- 村上美智子「小中連携教育によって何が変わるのか」『教職研修』12月号 2013 pp. 21-23.
- 文部科学省『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』東洋館出版社 2008a.
- 文部科学省『中学校学習指導要領解説 外国語編』開隆堂 2008b.
- 文部科学省 (2008c) 「幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について (答申)」

- (www.mext.go.jp/component/a_menu/.../20080117.pdf) 〈2014.6.28 確認〉
文部科学省 『小学校外国語活動 研修ガイドブック』 旺文社 2009.
文部科学省 (2013a) 「人材力強化のための教育戦略」
(<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/keizaisaisei/skkaigi/dai4/siryou7.pdf>) 〈2014.6.28 確認〉
文部科学省 (2013b) 「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」
(http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/12/1342458.htm) 〈2014.6.28 確認〉
渡邊時夫・高梨庸雄・齋藤榮二・酒井英樹 『小中連携を意識した中学校英語の改善』 三省堂 2013.

資料1

小学生クラス 指導計画

レッスン	題材	スキット
Lesson 1	レッスンで英語をたくさん使おう	Who wants to try? Let me try. Who knows the answer? I know! How do you say <i>taikukan</i> in English? It's 'gym' in English. Are you finished? Almost. Can you sign here? Of course.
Lesson 2	友だちにインタビューしよう	Where do you live? I live in <i>Nishi Nippori</i> . Do you have any brothers? I have one brother. What's your favorite food? I like ice cream. What's your favorite subject? I like P. E..
Lesson 3	遊ぶ約束をしよう	What shall we do? Let's play dodge ball. That's a good idea. (Sorry, I can't.) Let's go to the gym. Please wait. Hurry up! It's my turn. Go ahead.
Lesson 4	食事をしながら英語を使おう	Are you hungry? Yes, I am. Do you like fish? Yes, I do. How about you? Me, too. Please pass me the soy sauce. Sure. Here you are. Do you want some salad? No, thank you.
Lesson 5	毎日の予定を話そう	Are you free on Monday? Sorry, I have a piano lesson. How about Wednesday? I have <i>juku</i> school on Wednesday. I'm free on Friday. That's great. Let's play on Friday. OK. See you on Friday.
Lesson 6	夏休みの計画を話そう	What do you have in your bag? I have a beach ball. Where are you going? I'm going to the swimming pool. Wow! That's great. Have fun! Thank you. Bye!
Lesson 7	道案内をしよう	Excuse me. Where is the City Hall? I'm lost. Go straight. Turn left at the corner. I see. Go three blocks. It's on your right. Thank you very much. You are welcome. Good-bye.
Lesson 8	買い物をしよう	May I help you? I'd like a cheese burger and French fries. Anything to drink? Small coke, please. For here or to go? For here. Three hundred and ninety yen, please. Here you are. Thank you. Have a good day!
Lesson 9	自分のことをもっと話そう	My name is Arisa. My birthday is August 25 th . I have one brother and one sister. I have a dog. I like chocolate and cake. My favorite subject is English. I want to be a teacher in the future. Thank you for listening.

資料2

中学生クラス 指導計画

レッスン	題材	発音クリニック
Lesson 1	Talking about myself Starting conversation Skit: Self-introduction	b, p, c, k, g
Lesson 2	Talking about past events Learning the past tense	t, d, m, n
Lesson 3	Talking on the phone Skit: What shall we do?	f, v, s, z
Lesson 4	Making suggestions Giving advice Skit: Let's make curry and rice	l, r, w, y
Lesson 5	Describing the places Giving the directions Skit: Where's the City Hall?	a, e, i, o, u
Lesson 6	Shopping at a local store Skit: May I help you?	Sound change: Liaison
Lesson 7	Introducing Arakawa	Sound change: Elision
Lesson 8	Talking about the future Skit: Where do you want to go this summer?	Sound change: Assimilation
Lesson 9	Presentation	Rhythm and intonation

資料3

中学生クラス 発音クリニック

Unit 1 Consonants: b, p, c, k, g

B b 両くちびるをきっちり閉じて、「ブツ」と短く言ってみましょう

b b bug

b b bed

b b big

b b boy

b b book



P p bの口のまま、声を出さずに「プツ」と息を強く飛ばします

p p panda

p p pen

p p pink

p p pig

p p penguin



C c / K k 息をしばらく止めて、思いっきり「クツ」と言ってみましょう

c c cat

c c cow

c c candy

c c can

c c cake



k k kangaroo

k k king

k k koala

k k key

k k kite



G g お腹の底から「グツ」と低く深い音を出します

g g gorilla

g g great

g g green

g g gum



Let's Chant!

Bubble gum, bubble gum in the dish

How many pieces do you wish?

One, two, three, four, five, six, seven, eight

資料4

中学生クラス ワークシート

Lesson 3 Talking on the phone 「友だちと電話で話そう」

日曜日に一緒に出かけよう

A: Hello. This is _____. May I speak to _____?

B: Speaking.

A: Hi, _____. Are you free on Sunday?

B: Yes.

A: Shall we go to _____?

B: That sounds great. Where is it?

A: It's in _____, Arakawa.

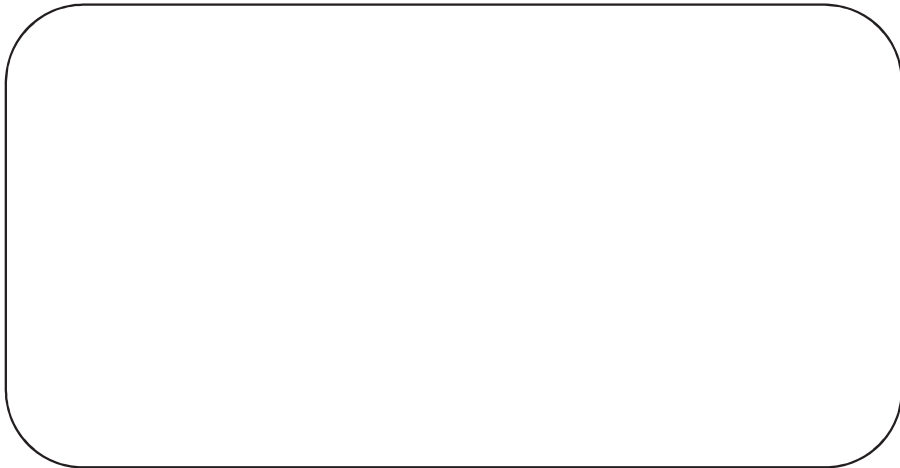
B: I see.

A: Let's meet at _____ at _____. (場所/時間)

B: OK. See you on Sunday!

☆ AETに荒川のどんなところを紹介したいですか。グループで話し合しましょう。

～Memo～ (AETに紹介したい荒川のお勧めスポットをリストしましょう)



Curriculum Development in English Camps
for Junior High School Students :
Communicative Language Activities in Intensive English Lessons

Hitomi HIGASHI

Abstract

An annual five-day English camp for junior high school students has been held by The Arakawa Board of Education since 2008. The author of this paper has developed programs for this English camp for five years. The objectives of the English camp are : to give junior high school students a chance to study English intensively with native speakers of English ; to learn more about Arakawa Ward and talk about their neighborhoods in English ; and to promote English language presentation skills. This paper intends to examine English programs developed for the five-day English camp and offer suggestions for designing a curriculum to promote, at the junior high school level, the ability to convey personal opinions and communicate with others in English.

Key words; English camp, communicativity, English immersion, curriculum development, Connections in English education